

人間環境学部

I 2012 年度認証評価 努力課題課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

II 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

人間環境学部では、理念に基づいたカリキュラム改革が着実に進められている。特に、コース制の定着をめざした取組は高く評価できる。

改善が必要な点、検討いただきたい点は以下の通りである。

①履修状況の確認について

履修モデルの改定、必修・選択必修などの制約を含むカリキュラム改革などコース制の実質的な定着には、コース推奨の科目を履修しているかなど、履修状況を継続的に確認していくことが重要であると考えられる。

②研究会（ゼミ）について

人間環境学部では、ゼミのことを研究会と称している。その意図を明確に示せば、研究会に参加することの魅力が、より明確になると考えられる。

③成績の把握について

試験放棄の状況確認は、前年度から、なかなか進んでいないのが現状である。この点、検討が必要と考えられる。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

①2015 年度は、コース別の成績上位者の推奨科目の履修状況を確認している。2016 年度から、新コースの選択必修科目については、2017 年度以降に履修状況を確認できるため、今後の継続的な確認を行いたい。

②人間環境学部は、学生に対して幅広い学びを提供する「学際的な」学部であり、複数のディシプリンや学際的な学習を統合する場として、また、最先端の新たな知見や実践知を産み出していく場として、通常使うゼミナールという名称ではなく「研究会」という名称を用いている。また、複数のゼミナールを受講できるという性格もある。

③现阶段では、E 評価の数や学年ごとの比率については、量的な把握をすでに行っている。成績不振者への面談を通して、個別に確認をしている。

III 自己点検・評価

1 教員・教員組織

【2016 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教員像および教員組織の編制方針】（2011 年度自己点検・評価報告書より）

人間環境学部の教員は、学部の理念・目的を前提に、後述する教育目標ならびにディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーをよく理解して、教育・研究に従事することが求められる。

本学部のカリキュラムは、5 つの専門科目群を設け、学際的な履修プランの道標として 4 つのコース制を採用しているが、科目群やコース毎に、学科制のような教員の固定的な貼り付けはしていない。これは、個々が従来の専門の枠内に留まって教育研究に携わるだけでは、環境問題の学際的教育は不可能なためである。環境問題の現場では分野の垣根を超えた協働が必要であることに倣って、本学部においても、役割を固定化しない、横断的で柔軟な組織編制を今後も模索してゆく。

市ヶ谷基礎科目を主担当とする教員比率は今でも他学部に比して高いが、このことが学部の専門教育に差し支えないよう、全教員が原則として初年次教育の「基礎演習」を担当し、市ヶ谷基礎科目の主担当者であっても必ず専門の授業とゼミナールをもつことにしている。他にフィールドスタディないし人間環境セミナーは全教員が参画することを原則とし、専門教育の導入にあたる 1 年次の「人間環境学入門」「環境科学入門」も、輪番によりほぼ全教員が受け持つ。こうして教員個々がカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを理解しながら、1 年次から卒業まで学生の教育に対して責任を多面的に果たす態勢の維持・充実に努めていく。

1.1 学部等として求める教員像および教員組織の編制方針を明確にしているか。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

はい いいえ

【根拠資料】 ※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。
 ・専任教員の募集について（公募文書）
 ・専任教員の昇格に関する申し合わせ

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。 はい いいえ

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】 ※箇条書きで記入。
 ・学部執行部の構成：学部長—教授会主任—教授会副主任
 ・学部内の基幹委員会の名称・役割
 ・戦略構想委員会：長期的な視野に基づき、学部のさまざまな戦略について構想する
 ・カリキュラム・基本制度委員会：カリキュラム全般に関する基本制度を検討する
 ・フィールドスタディ委員会：フィールドスタディの企画、運営に関して検討する
 ・広報広聴委員会：学部の広報広聴に関する作業を行う
 ・人事委員会：学部の人事全般に関する事項を行う
 ・責任体制：学部執行部が教授会に対する包括的な責任を負う。また、執行部から一部の事務執行を各種委員会に対して委任するとともに、当該領域における諮問組織として審議を委ね、各教員の意見徴収を行っている。ただし、人事委員会は3名の選挙によって選出された委員と、学部長と教授会主任を加えた5名によって構成され、合議制により人事に関する事項について協議、決定を行い、専管事項については教授会に対して独立した権限を行使する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・2016年度各種委員会委員名簿

③教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。 はい いいえ

(～400字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。
 専門科目を担当する教員の採用にあたって、市ヶ谷基礎科目を主に担当する教員以外は、大学院科目の担当が可能なように、公募書類にも明示してある。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・専任教員の募集について（公募文書）

1.2 教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。 はい いいえ

(～400字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性等の観点から教員組織の概要を記入。
 教員像：学問分野は異なっても、持続可能性に関わる教育・研究・社会的な実践への従事が可能であること。さまざまな学問分野と協調し、分野を超えて学際的な学部を担うことができること。
 教員組織の編制方針：戦略構想委員会、カリキュラム・基本制度委員会、人事委員会などと協議しながら、欠員を補充し、適切な教員編制に努めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・2015年度 人間環境学部 専任教員専攻分野および年齢分布

2015年度専任教員数一覧 (2015年5月1日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教員数	うち教授数
人間環境	24	4	2	0	30	18	9

専任教員1人あたりの学生数（2015年5月1日現在）：47.8人

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。 はい いいえ

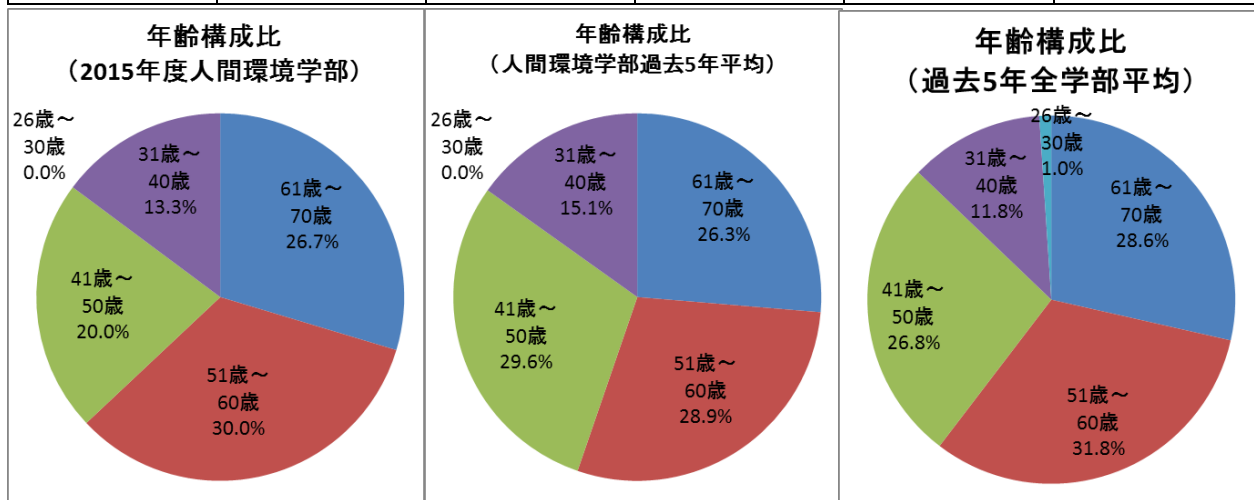
【特記事項】 (～200字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
 ・専任教員職位および年齢表
 ・2015年度 人間環境学部 専任教員専攻分野および年齢分布

年齢構成一覧

(2015年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2015	0人	4人	9人	9人	8人
	0.0%	13.3%	20.0%	30.0%	26.7%



1.3 教員の募集・任免・昇格は適切に行われているか。

①各種規程は整備されていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・人間環境学部人事規則
- ・法政大学人間環境学部学部長選出規則
- ・人間環境学部任期付教員採用に関する規則
- ・人事に関する細則
- ・教授会の決議に関する覚書
- ・兼任・兼任教員への委嘱に関する申し合わせ
- ・「在外研究員」及び「国内研究員」等に関する派遣候補者選定に関する申し合わせ
- ・専任教員の昇格に関する申し合わせ
- ・専任教員の定年延長に関する申し合わせ
- ・専任人事の進め方に関する覚書
- ・「教授会規程」の解釈（申し合わせ）学部長の任期等について
- ・兼任教員の採用基準に関する申し合わせ

②規程の運用は適切に行われていますか。

はい いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- ・人事規則にもとづいて人事委員会を設置している。人事委員会と教授会は下記に述べる各種規則および申し合わせ事項を適切に運用している。
- ・学部において、教員の募集・任免・昇格に関連した各種規則を整備しており、これらの各種規則および申し合わせ事項にもとづいて教員の募集・任免・昇格が適切に行われている。

1.4 教員の資質向上を図るための方策を講じているか。

③学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

A B C

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・カリキュラム・基本制度委員会において、学部内のFD活動に関する検討を行っている。
- ・なお、FD活動を組織的に進めるために、2016年度にカリキュラム・基本制度委員会の小委員会として、FD推進チームを立ち上げることを決定した。

【2015年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・ほぼ全員の教員が担当するフィールドスタディについて、担当教員にフィールドスタディの報告書（教員向けのフィールドスタディ報告書、学生向けのフィールドスタディカタログ）を執筆させて、教員間で共有し、振り返り活動を行っ

た（2015年秋学期）。

- ・40代以下の教員を中心として次世代フォーラムを立ち上げ、学部の将来構想に関する組織学習を実施した（2015年11月4日、法政大学市ヶ谷キャンパス、内容：人間環境学部の将来構想について、12名）。この内容は、学部設置の戦略構想委員会に提言され、11月教授会でも報告された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・フィールドスタディ報告書
- ・フィールドスタディカタログ
- ・人間環境学部・戦略構想委員会ニュース

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・HOSEI2030に即して、戦略構想委員会を設置し、学部の中長期ビジョンの策定に着手した。	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度から2018年度に、学部設置時から在籍していた教員のうち数名が退職を迎えるため、その補充人事について検討する必要がある。
- ・次世代教員によるFDの推進を図る。

【この基準の大学評価】

人間環境学部は、「サステナビリティ」（持続可能性）を基本コンセプトとして、学際的なカリキュラム展開による「持続可能な社会」の構築に貢献する人材の輩出を目的としている。専任教員の採用及び昇格は、執行部、人事委員会、カリキュラム基本制度委員会で連携を取りながら適正に行われており、また、大学院教育との連携を踏まえた公募も行われており適切である。学部執行部及び学部内基幹委員会の役割及び責任体制も明確である。学部設置の理念に基づく教員体制は、学部長を含む人事委員会や戦略構想委員会でも協議され、組織的な対応となっており評価できる。専任教員の年齢構成は、40歳未満の比率が若干低い。教員の募集・任免・昇格等の各種規則は整備されており、今後の対応に期待したい。学部内のFD活動については、カリキュラム・基本制度委員会において検討が行われており、2016年度からは、同委員会内の小委員会としてFD推進チームも立ち上げられていることから、その活動により今後のFD活動推進の原動力として実績を積んでいただきたい。複数名の教員で担当するフィールドスタディ等を異なる教員の教授方法を確認する場として活用したり、若手教員の将来構想に関する次世代フォーラムも開催されており、FD活動は適切に行われている。

2 教育課程・教育内容

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【教育課程の編成・実施方針】

本学部の専門教育はコース制を採り入れたカリキュラムを特色とする。コース制は学科のような所属の縛りではなく、学生個々が、中心的に学ぶ専門領域を自主的に選択し、かつ学際的に領域融合の学習を進めるための道標である。

カリキュラム体系は、まず初年次教育を行う「リテラシー科目」において、大学生としての一般的なリテラシーと、人間環境学部の学生として必要なリテラシーの双方の修得を目的として教育課程を編成する。次に人間と環境の調和共存について専門的に学ぶ「展開科目」では、社会科学・人文科学・自然科学の科目群を学際的に組み合わせながら特定領域について理解を深めていくコース制を前提として、講義科目を編成する。科目の配置は、本学部の人材育成の基本理念である幅広い「環境教養」と実践的な「政策能力」をともに身につけ、またその過程で、グローバルな思考とローカルな思考をあわせ持つことを指針として、体系的、時代状況に適合する柔軟性、コースごとの関連科目の配置状況など、編成上のバランスに留意しながら進めていく。総合的には、各コースの学習領域としての特性をさらに明確化するため、コースの再編も視野に入れつつ、カリキュラム体系における機能の充実をめざす。

コース制指導の要となるのは、少人数制で集中的な学習を積み重ねてゆく研究会（ゼミナール）である。この研究会は、

各教員が学生とともに創意工夫を重ねることで、本学部全体の教育水準を向上させていく「共創」の装置であるという認識に基づいて、さらに充実を図っていく。

「社会との交流・連携」は、通常の講義科目とは別に配置される「フィールドスタディ」「人間環境セミナー」「研究会」を中心として充実を図り、このほか「リテラシー科目」や「展開科目」の中の一部も含めて、学生が4年間を通して多様な社会との出会いと経験を得られるように配慮していく。人間と環境の調和・共存のためには、実社会の様々なステークホルダーの「協働」が不可欠であるが、社会との交流の機会提供は、その「協働」のネットワークの担い手にふさわしいコミュニケーション能力の涵養に益すると期待される。

以上のような教育課程の編成にあたっては、内部質保障のシステムによるPDCAサイクルをふまえ、常に調整を行っていくが、それにとどまらず、本学部の特性と資源をより発揮するためのイノベーションを志向する姿勢を維持していく。そのために、カリキュラム体系の安定性に留意しつつも、「人間環境特論」等を活用して、実験的な講義内容も提供していくことに務める。

そして教育課程の実施にあたっては、学際学部であることをふまえ、学生が幅広く学びながら、かつ特定領域への関心も深めていけるように、「履修モデル」「基礎演習」「研究会」「オフィスアワー」などの機会を活用し、履修への助言・指導を行いながら、学生の自発的な学習意欲を引き出すコミュニケーションを専任教員の全員参加により進めていく。

2.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。 A B C

(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修への配慮が行われているか概要を記入。
 コースの趣旨及び教育目標をより明確なものにするため、カリキュラム基本制度委員会でコース制の編成に関して検討を行い、コース名を変更した(サステイナブル経済・経営コース、ローカル・サステイナビリティコース、グローバル・サステイナビリティコース、人間文化コース、環境サイエンスコース)。そして2016年度入学者から、2年次進級時に全学生を各コースに所属させた上で、コースコア科目(10科目20単位)を選択必修とした。また、学際的な学びを担保させるために、コース共通科目(5科目10単位)も選択必修とした。さらに、選択必修科目である人間環境セミナーを土曜日に開講していたが、多様な学生ニーズに対応するために、2016年度は平日夜間にも開講することになった。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・カリキュラム・基本制度委員会議事録

②幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。 A B C

(～400字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。
 人間環境学部は学際学部であるため、幅広い知識と総合的な判断力を涵養することが、教育課程の編成の基本である。具体的には、フィールドスタディや第一線で活躍する方々をお迎えして行う人間環境セミナーなどにより、実践的に上記の能力を涵養することができる。また、特に豊かな人間性を涵養する教育課程上の対応として、人間文化コースを設置した。同コースの科目はすべて他のコースの学生も履修することができる。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度 人間環境学部 履修の手引き

2.2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

①学生の能力育成のための教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。 A B C

(～400字程度まで) ※学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。
 学部の専門科目の体系をリテラシー科目と展開科目に区分し、さらにリテラシー科目をフレッシュマン科目とスキルアップ科目に、展開科目を基幹科目と政策科目にそれぞれ区分し、段階的な能力育成が可能ないようにしている。また、5つのコース制により、学生の学びの志向性を明確にしている。
 フィールドスタディを学部の特色あるPBLを実践する重要科目として位置づける一方で、人間環境セミナーを社会との交流・連携を実践する重要科目として、学部の特徴的な科目として定位している。なお、これらフィールドスタディと人間環境セミナーを2014年度入学生から選択必修科目(合計6単位以上修得)とし、学部生全員に対して、学部の特徴的な学びを促すことを制度化している。
 また、2015年度にコース修了論文を設置し(2016年度から運用開始)、すべての学生に対して「卒業論文」に該当する単位を修得できるように制度変更を行った。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2016年度 人間環境学部 履修の手引き	
②初年次教育、キャリア教育は適切に提供されていますか。	A B C
<p>(～400字程度まで) ※学生に提供されている初年次教育、キャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>初年度教育として、①人間環境学部での勉学の方向づけ、②人間環境学のアプローチの多様性を学ぶことを目標とする「人間環境学への招待」を春学期に設置し、秋学期には基礎演習を設置し、初年次教育の継続性を構築している。なお、2015年度から社会人学生専用の基礎演習を設置した。また、1年次の夏休みからフィールドスタディを履修でき、PBLを初年次教育から行うことになっている。さらに理科系分野のリメディアルの要素も兼ね備えた科目として「サイエンスカフェ」を設置した。キャリア教育に関しては、本学部が基本理念に掲げる「社会との交流・連携」を展開することができる研究会・人間環境セミナー・フィールドスタディなどを社会人基礎力の修得の場として位置づけ、人間環境学への招待でも、キャリア教育の導入教育を実施している。さらに、「キャリア入門」、「自治体職員をめざすための研究会」などのキャリア教育に関連した科目を設置しながら、カリキュラム体系の特性を活用した総合的な実施を進めている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年度 人間環境学部 履修の手引き ・2016年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) 	
③学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	A B C
<p>(～400字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>海外フィールドスタディを3-4コース設置し、学生が国際性を涵養する機会を提供している。海外フィールドスタディ奨励金制度を設け、学生に対する旅費の補助を行っている。また、昨今の海外事情の変化に対して学生の安全に留意し、コースの見直しを行っている。</p> <p>語学教育では、専門科目内のリテラシー科目として、アクティブ語学(英語)とテーマ別英語を開講している。アクティブ語学では、初級会話・中級会話・上級会話・ビジネス会話と、レベル別および目的別に授業を展開し、学生の発信型英語コミュニケーション能力の向上に寄与している。テーマ別英語では、学部の専門分野と関わりの深いテーマを英語で講義・ディスカッションを行なうなど、学問的内容の学習と語学力の涵養を同時に目指す融合型アプローチを実践している。</p> <p>スーパーグローバルユニバーシティの採択に伴い、英語学位プログラム(SCOPE)の設置準備を行い、2016年度秋学期から開始する。今後に向けて、人間環境学部との科目の相乗りも視野に入れた検討を開始した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金規程 ・法政大学人間環境学部海外フィールドスタディ奨励金取扱細則 ・2016年度 人間環境学部 講義概要 (シラバス) ・SCOPE設置準備委員会議事録 	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・コース修了論文、選択必修科目の導入、研究会単位の上限の制限(講義科目と演習のバランスをとるため)	2.1①

(3) 現状の課題・今後の対応等(必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の増加に伴う、指導・ケアなど学部内の受け入れ体制の整備を行うこと。 ・社会人学生の増加に伴う、指導・ケアなど学部内の受け入れ体制の整備を行うこと。 ・新しいコース制の適切な運用と検証を行うこと。

【この基準の大学評価】

人間環境学部の専門教育はコース制を取り入れたカリキュラムとなっており、コースの主旨及び教育目標をより明確なものにするため、カリキュラム基本制度委員会でコース制の編成に関する検討が行われ、コース名も変更されている。ま

た、科目区分（選択必修への移行）や科目開講曜日・時限の変更も具体的に検討されており評価できる。フィールドスタディや、実際に専門分野の第一線で活躍する方々を招へいして開催される人間環境セミナーを実施するほか、コース修了論文も新たに設置され、各過程での工夫・改善も積極的に行われている。初年次教育として学部での勉学の方向づけや、人間環境学のアプローチの多様性を学ぶ一環として、「人間環境学への招待」が春学期に設置され、それに伴う継続性を意識した基礎演習も開講されており、その成果が期待される。また、理科系分野のリメディアル科目の一翼として「サイエンスカフェ」、「キャリア入門」や海外フィールドスタディのコース見直しや英語学位プログラム(SCOPE)の設置準備も進んでおり、点検・評価項目に対する取り組み状況は満足できるものであると判断する。

3 教育方法

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 能力育成の観点から教育方法および学習指導は適切か。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

A B C

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・1年次教育では、入学時のガイダンスや必修科目である「人間環境学への招待」及び「基礎演習」を通じて、全員に導入的な履修指導を実施している。
- ・「人間環境学への招待」では、授業構成がコース制の説明と関連科目のイントロダクションになるように計画されており、コースに沿って担当教員を配置している。
- ・2年次からは、学生が専門性を意識して修学できるようにコース制を採用している。
- ・学習における専門性を意識した「履修モデル」を学部として作成している。特に2年次ははじめのガイダンスでは、コース制・履修モデル・研究会の有機的なつながりに力点を置いて説明している。
- ・コース別の科目の履修状況について、データで確認をしている。
- ・なお、2015年度に履修指導体制を再検討し、留学生および社会人学生の新生（編入学含む）に対するガイダンスを実施することにし、2016年4月初旬に実施した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・2016年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）
- ・コース別履修状況

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

A B C

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

初年次教育の「人間環境学への招待」では、大学教育における講義の受け方、ノートテイキングの方法などを講義している(2016年度からは、1年次春学期の講義に対応すべく、リーディング、ライティングスキルについても指導することになった)。「基礎演習」では、図書館実習や、学生自らが学習する態度を身につけるノウハウを提供し、少人数教育を経験させ、本学部の学習指導上、重要な位置づけにある「研究会」での学びの基礎を習得させる。本学部では、専任教員は最低1つの「研究会A(通年)」(2～4年までが継続参加する少人数教育)を担当し、卒業論文にあたる「研究会修了論文」の指導を行う。なお、ゼミに所属しない学生に対して、卒業論文に相当する「コース修了論文」を執筆できる制度を決定し、2016年度から実施される。その他、オフィスアワーの時間を中心として、「履修モデル」に関する質問等、学習の方法に関する学生の質問に応じる体制がある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度 人間環境学部 履修の手引き
- ・2016年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

A B C

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

すべての授業において授業外で行うべき学習活動（準備学習等）が指示されており、その内容はシラバスによって周知されている。少人数教育である研究会では、学生が予習・復習を行ってこることが前提となっており、研究会の中には、サブゼミを開設している場合も多い。これら正規の研究会以外の時間において、学習（予習・復習）を行うことに対して、担当教員が適宜、指示をしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016年度 人間環境学部 講義概要（シラバス）

④教育上の目的を達成するため、新たな授業形態の導入に取り組んでいますか。	A B C
<p>【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディは PBL を実践する授業である。学部設立時から学部の特色ある科目として、重点的に取り組んでいる。 ・研究会においてグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によって、アクティブラーニングが実践されている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年度 人間環境学部 講義概要（シラバス） 	
3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。	
①シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	はい いいえ
<p>【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスは適正に作成され、作成に関する情報は教授会構成員間で共有されている。できあがったシラバスを、カリキュラム基本制度委員会のメンバーがすべてのシラバスのチェックを行った上で、学部執行部が縦覧している。とくに新設科目や問題のある科目については重点的にチェックしている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
②授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい いいえ
<p>【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の授業の運営は原則として担当教員に委ねられているが、シラバスから逸脱した授業などに対する学生からの声を拾うために、授業改善アンケートの結果を学部執行部がチェックしている。 ・執行部が中心となり、授業参観を行うことによって、シラバス通りの講義が行われているか、確認をしている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2015年度 教員による授業相互参観実施状況報告書 	
3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	A B C
<p>【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価はすぐれて担当教員の裁量事項であるが、A+から D、E までの評価割合は学部執行部として把握している。とくに A+の割合については、大学の基準を周知している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい いいえ
<p>(~400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単位認定の規定を設けて適切に単位認定を行っている。さらに本学部到他大学等から編入する学生は、当学部の性格上、多様な大学や学部等の出身者がいるので、それらの学生にきめ細かく対応するために単位認定委員会を設置し、執行部によって最終的なチェックをしている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単位認定規定 	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	A B C
<p>(~400 字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>学部別に集計された GPCA と全学の GPCA を教授会構成員に周知している。また、コース別の GPA 分布を確認している。さらに、試験における不正行為を防止するために、定期試験における参照物についての申し合わせ事項を策定している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 ・コース別 GPA 分布 ・定期試験における参照物の取扱について 	
3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。	
①教育成果の検証を学部（学科）ごとに定期的に行っていますか。	A B C

<p>【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部として入試形態別の成績等を毎年検証し、その結果は教授会構成員で共有している。 ・研究会修了論文の執筆者数の把握をしている ・1年次必修科目の「人間環境学への招待」において、入学直後（4月）と春学期終了時（7月）で独自の授業アンケートを行い、入試経路別に人間環境学部の学びに対する姿勢などについての分析を実施し、教育内容・方法の改善をすべく検証を行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究会別 研究会修了論文提出率 ・2015年度 人間環境学部・入学アンケート・集計結果 ・2015年度 人間環境学部・終了時アンケート・集計結果 	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	A <input checked="" type="checkbox"/> B C
<p>【利用方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業改善アンケート結果の利用は、主に担当教員に委ねられているものの、学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会議事録 	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（必須項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

<ul style="list-style-type: none"> ・FD推進チームによる、教育方法の検討を行うこと。 ・授業アンケートについては、マスキングがなくなることへの執行部としての対応を図ること。
--

【この基準の大学評価】

<p>人間環境学部では、必修科目である「人間環境学への招待」及び基礎演習により、1年次教育では、導入的な履修指導や学習指導が行われ、2年次からは専門性を意識したコース制が導入されている。履修指導体制の再検討も行われており、評価できる。すべての授業において授業外で行うべき学習活動（準備学習等）もシラバスによって周知されており、研究会でも学習（予習・復習）の指示が行われている。今後の学習時間の定量評価にも期待したい。学部設立時からPBL型フィールドスタディが導入され、研究会においても積極的にアクティブラーニングが実践されている。全てのシラバスは、カリキュラム基本制度委員会のメンバーによりチェックされ、また、執行部が中心となった授業参観（サンプル的に5回実施）を行うことによる、授業検証も実施されている。秋学期からはFD推進チームの若手教員の中で相互授業参観を行う予定になっており、評価できる。成績評価と単位認定については、規定やGPCAの周知及び大学内でのガイドラインを遵守することにより、遂行されている。学部として入試形態別に成績等の検証も毎年行われ、同時に入学直後と春学期終了時の独自アンケートの集計結果を用いた教育内容・方法の改善も実施されており、改善への組織的な意欲も感じられる。「学生による授業改善アンケート」は一部執行部が主体となり、問題点抽出にも活用されているが、独自アンケートを含めた組織的な活用の検討も併せて期待したい。</p>

4 成果

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

<p>【学位授与方針】</p> <p>本学部は、「理念・目的」「教育目標」に基づき、市ヶ谷基礎科目とともにコース制を前提として編成された専門教育のカリキュラム体系において、所要単位の履修を通して多様な能力を獲得することを学位授与の方針とする。</p> <p>学部専門科目では、まず人間環境学の学際性を理解した上で、環境科学の基礎的な思考力、実践的な語学や情報処理の</p>

基礎的な能力、文献購読・文章作成・コミュニケーションの基礎的な能力などを獲得することをもとめる。その上で、カリキュラム体系の前提となるコース制に基づいて、以下のような能力構築を図ることをもとめる。

1. エコ経済経営コースでは、環境配慮型の社会経済システムへの転換に不可欠な事業活動のCSRへの理解を基礎として、市場経済のメカニズムや関連法に関する知識とともに、持続可能な企業経営とそれを誘導する公共政策に関する実践的な思考力を身につけていること。
2. 地域環境共生コースでは、地域で生起する「環境」に関わる問題の解決にむけて、市民・自治体・企業・NPOなど多様な主体が協働しながら取りくんでいる現状を学び、学際的な発想で、持続可能な地域社会の担い手として政策型思考を発揮できる知識・教養を身につけていること。
3. 国際環境協力コースでは、グローバルな視野で持続可能な社会を担う国際人を目標に、国・企業・国際機関・NGO等による、地球環境の保全や発展途上国への支援等にかかわる国際協力に、直接的ないし間接的に参加・貢献しうる知識・教養を身につけていること。
4. 環境文化創造コースでは、人間が築いてきた広義の「文化」を環境の視点から見直す作業や、今後の持続可能な生活文化のあり方の探求を通じて、環境共生型の人間形成や文化創造に資する知性や感性を涵養し、その方面で社会に出てから有意義な発信・啓発ができる知識・教養を身につけていること。
5. 環境サイエンスコースでは、環境問題・健康問題・資源・災害等の諸現象の自然科学による理解とこれらに対応するための科学技術の広範な知見にもとづき、持続可能な社会における科学技術のあり方と合理的な環境政策について思考する知識・教養を身につけていること。

以上のような、コース毎の専門的な能力の基盤となる、全コース共通の教養として、「環境教養」すなわち、環境を手がかりとして人類の軌跡や現代社会の諸問題について幅広く思考をめぐらしながら文明を問い直し、未来を展望できる力と感性を身につけていること。

4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。

①学生の学習成果を測定していますか。

A B C

(～400字程度まで) ※取り組みの概要を記入(習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。

ゼミに所属する学生については、担当教員が受講態度やレポート、研究会修了論文等で随時、測定している。学部全体の大まかな傾向を把握するために、大学評価室卒業生アンケートの結果を教授会で確認している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究会修了論文集
- ・教授会議事録

②成績分布、進級などの状況を学部(学科)単位で把握していますか。

はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員
- ・把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料
- ・データの種類：成績上位者の分布、進級状況

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教授会議事録

③学習成果を可視化していますか。

A B C

【学習成果可視化の取り組み】※取り組みを箇条書きで記入(取組例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等)。

- ・フィールドスタディ報告書を作成し、フィールドスタディの全コースの実施状況を可視化している。
- ・研究会における研究会修了論文の冊子化を行っている。
- ・研究会修了論文のタイトルは、学部紀要(人間環境論集)および学部HPで公開している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・フィールドスタディ報告書
- ・研究会修了論文集
- ・学部紀要(人間環境論集)
- ・<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/thesis/index.html>

4.2 学位授与(卒業・修了認定)は適切に行われているか。

①学生の就職・進学状況を学部(学科)単位で把握していますか

はい いいえ

【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】 ※箇条書きで記入。

- ・報告があった学生に限定されるが、実績は把握している。
- ・4年生に対しては進路が決定次第、大学に報告するように指導している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

- ・新コース制の履修状況を確認すること。
- ・コース修了論文の提出状況を把握すること。

【この基準の大学評価】

人間環境学部では環境科学の基礎的な思考力、実践的な語学や情報処理の基礎的な能力、文献購読・文章作成・コミュニケーションの基礎的な能力を獲得した上で、コース制に基づく「環境教養」の未来を展望する力と感性の習得を成果としている。その評価として、ゼミに所属する学生については、担当教員が適宜、受講態度、レポートや研修会修了論文等で個別に実施されているが、学部全体として、習熟度達成テスト等の評価方法の検討も望まれる。また、大学評価室卒業生アンケートの結果は教授会で確認されているが、各項目に対する組織的な対応もお願いしたい。学部執行部及び教授会構成員による成績分布や進級状況も基本データの把握は行われている。フィールドスタディの全コースの実施状況は、フィールドスタディ報告書により可視化されており、評価できる。学生の就職・進学状況については、実績の把握や報告の指導は行われているが、より一層の詳細な学部としての取組が期待される。

5 学生の受け入れ

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

【学生の受け入れ方針】

本学部は、人間と環境の調和共存について学ぶ文系の総合政策学部という基本的な性格に適性がある学生、すなわち、一定以上の基礎学力を有し、かつ、持続可能な社会の実現に向けて文系から環境問題に取り組むことに対して高い意欲を持つ学生を受け入れる。学生選抜の具体的な着眼点と選抜方法については、一般入試と特別入試に大分される多様な受験機会を、以下のように機能分担を図っていく。一般入試 A 方式・T 日程・センター試験は、本学部で学ぶための基礎学力を重視した選抜を行なう。特に A 方式は、本学部の文系を中心とした教育プログラムに関する基礎学力を修得しているかどうかを選抜の着眼点とする。それに対して T 日程・センター試験は、環境に関するサイエンスやテクノロジーについて関心がある学生にとっても、それらの領域の基礎となる学力を修得していれば選抜に対応できるように機能分担する。

特別入試のうち、指定校推薦・付属高校推薦は、高等学校の平常評価で一定の学力の修得が証明されていることを前提として、本学部で学ぶ意欲の程度を選抜の着眼点とする。それに対して自己推薦入試は、高等学校で修得すべきリテラシー能力を考査することを前提として、それまでの人生経験や社会活動の経験などに基づいて説明される本学部で学ぶ意欲の程度、コミュニケーション能力を選抜の着眼点とする。

社会人特別入試は、社会人としてのリテラシー能力を考査することを前提として、これまでのライフキャリアと今後のデザインに基づいて説明される本学部で学ぶ意欲の程度、コミュニケーション能力を選抜の着眼点とする。

その他、転編入・スポーツ推薦・留学生などの特別入試も、一定の基礎学力の証明またはその考査を前提として、本学部で学ぶ意欲の程度を選抜の着眼点とする。

5.1 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

2015年度は、定員の超過・未充足に対して、特別の対応をする必要がなかったが、定員を超過したとき、基礎演習と情報処理科目のコマを一時的に増やして対応する。また、大学から提供される資料を、翌年度以降の入試方針に反映させている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

定員充足率（2011～2015年度）

（各年度5月1日現在）

種別\年度	2011	2012	2013	2014	2015	5年平均
入学定員	320名	320名	333名	333名	333名	
入学者数	330名	364名	346名	338名	332名	
入学定員充足率	1.03	1.14	1.04	1.02	1.00	1.04
収容定員	1,280名	1,280名	1,293名	1,306名	1,319名	
在籍学生数	1,452名	1,471名	1,469名	1,447名	1,433名	
収容定員充足率	1.13	1.15	1.14	1.11	1.09	1.12

5.2 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について検証していますか。

A B C

【検証体制および検証方法】※箇条書きで記入。

・戦略構想委員会、広報広聴委員会において、学生募集や入学者選抜の結果について検証している。前者は学生の受け入れに関する長期的な戦略、後者は受験者への具体的な広報戦略に反映している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・人間環境学部・戦略構想委員会ニュース

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・戦略構想委員会で、学生の受け入れに関して、長期的な戦略について検討を行った。	5.2 ①

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・一般入試、特別入試における、各入試経路別の受験者の確保に関する長期ビジョン、および広報戦略の策定を行う。

【この基準の大学評価】

人間環境学部では、人間と環境の調和共存について学ぶ学部という基本コンセプトに基づき、適性がある学生（一定以上の基礎学力の担保）、かつ持続可能な社会実現に向けて環境問題の取り組みに対して高い意欲を持つ学生の受け入れを行っている。具体的な選抜方法は、例えば、一般入試（A方式・T日程・センター試験）、特別入試（指定校推薦・付属校推薦）、社会人特別入試、その他（スポーツ推薦・転編入・留学生）による機能分担が、経路別に図られている。定員の著しい超過・未充足は発生していないが、定員を超過した場合の対応策も具体化されており、評価できる。また、戦略構想委員会及び広報広聴委員会において、学生の受け入れに関する長期的な戦略や受験生への具体的な広報戦略も施策・実施されている。今年度、留学生の入試科目から英語を除いたことで、東南アジア系受験生のハードルを低くし、入学者数を増やしたことは評価できる。今後の学部の特色を活かした、特別入試を含む入試制度のさらなる拡充や広報戦略の策定が期待される。ただし、過去5年間の収容定員充足率が平均1.12となっているのは注意を要する。

6 学生支援

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生への修学支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい いいえ
【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。 ・データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員 ・把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料 ・データの種類の：進級状況	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・教授会議事録	
②成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。	A B C
【成績不振学生への対応体制および対応内容】 ※箇条書きで記入。 ・1年次の学生に対しては、基礎演習において欠席回数が多い学生をチェックしている。欠席回数が多い学生に対して個別に電話等で連絡を取り、学生が置かれている状況を把握している。これにより、深刻な成績不振に陥る前の早い段階での対応が可能になる。 ・学習指導委員会において、GPA0.8以下の学生を呼び出し、面接を実施した。また、GPA1.5以下の学生については、注意喚起の文書通知を学生および保証人に対して行った。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・面談記録 ・送付文書「成績について（注意喚起）」	
③学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	A B C
（～400字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。 2014年度までに外国人留学生入試の制度改正を実施し、外国人留学生が増加することが予想されたため、留学生アドバイザーを設置することを決定した。また、2016年度の外国人留学生の新入生に対して、留学生ガイダンスを実施することにした。2016年4月初旬に、在校生の留学生も含めて、留学生ガイダンスを実施した。なお、外国人留学生に対する今後の修学支援については、2016年9月から開始される英語学位プログラム（SCOPE）の学生とともに、定期的な会合の開催等を検討している最中である。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・学習指導委員会における、成績不振学生への対応	6.1 ②
・留学生の修学支援としての入学ガイダンスの実施	6.1 ③

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

<ul style="list-style-type: none"> ・外国人留学生のより効果的な修学支援を実施する。 ・社会人学生の効果的な修学支援を実施する。 ・障がいのある学生への修学支援のあり方について検討を進め、速やかに実行に移す。
--

【この基準の大学評価】

<p>人間環境学部教授会執行部および教授会構成員により、学務部及び学部長会議で提示された資料等により、卒業・卒業保留・留級者等の把握は適切である。入試経路別の成績調査を行い、それらの学習成果の傾向を把握している。成績不振な学生への対応として1年次の事前ケアは非常に重要であるが、基礎演習において欠席回数が多い学生をチェックし、個別に電話等で連絡を取り、学生が置かれている状況を把握することにより、成績不振に陥る前の対応をしている点は、非常に評価できる。継続したケアを今後もお願いしたい。また、学習指導委員会においては、GPA0.8以下を対象とした学生の呼び出し面談や注意喚起の文書通知を学生や保証人にも送付し、学部独自の組織的な取り組みも行われており、学部としての成績不振学生への対応は非常に優れている。外国人留学生に関しては、留学生アドバイザーを設置し、また、留学</p>

生ガイダンスの実施や修学支援に関する定期的な学生との会合も検討されており、今後の対応にも期待したい。

7 内部質保証

【2016年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2015年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

2015年度質保証委員会は、4名の教員と執行部によって実施されている。

- ・第1回質保証委員会（2015年度中期目標の策定について）、2015年5月2日実施
- ・第2回質保証委員会（大学評価報告書について）、2015年7月9日実施
- ・第3回質保証委員会（2015年度中期目標、年度目標の最終報告書）、2016年3月16日実施

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

人間環境学部の質保証委員会は、4名の教員と学部執行部により構成されている。2015年度は、中期目標の策定、大学評価報告書及び中期目標、年度目標の最終報告書に関する検討が、質保証委員会として実施されており、適切に質保証委員会が活動していると思われる。質保証委員会の検討事項は多様であり、学部としての対応も労力を要することであると承知しているが、PDCAサイクルを意識した質保証委員会の運営・活動も是非、お願いしたい。

【大学評価総評】

人間環境学部における大学評価委員会の評価結果に対する対応は、履修状況の確認、研究会（ゼミ）、成績の把握についての現状説明及び対応方法が明確に示されている。全体として、学部独自の委員会による組織的な教育を実施するための運営が行われており、カリキュラムの見直しや次世代教員によるFDの推進も計画されており、評価できる。特にカリキュラムについては、国内外のフィールドスタディ、少人数でのびやかに各テーマを掘り下げる研究会（ゼミ）、地球市民へのステップアップをテーマにした英語学位プログラム等も実践されている。特に5つのコースとそれを軸にした幅広いカリキュラム構成は、学際的教養と高度な問題解決能力を涵養するものとなっており、また、リテラシー科目と展開科目の構成も充実している。学部としての組織的な取り組みとして、非常に細かく履修指導、学習成果の可視化、成績が不振に陥る前のケアも行われており、今後の成果が大いに期待されることである。新コースの履修状況の確認とコース修了論文の提出状況の把握を早急をお願いしたい。学部の特色を活かした外国人留学生に対する今後の修学支援も、引き続きお願いしたい。非常に良い取り組みが行われていることは、学部案内、履修の手引き、シラバスからも確認される。過去5年間の収容定員充足率が平均1.12は注意が必要である。